石門

心學道の話

初篇上

教育
157
0

10077

教科書文庫

1
101
10-1842
200030
2444

天保13
1842

教育学科
157
9

廣島 奥田頼杖翁講話
江戸 平野橘翁老聞書

石門

心學道話

今所其刻自
初篇至七篇

花蹊堂

広島大学
教
53548
図書

心學道乃講序

頼杖先生名在中。氏ハ奥田。俗稱ハ壽太。藝陽の人なり。淇水先生ハ親炙〳〵。石門ハ蘊奥を究め。四方に遊で道徳流を數歳。天保己亥乃〳〵東都に来て講を參前舍ハ開く。予典を聞くことを得たり。朝夕傍ハ在て

其人と導くを視ふ能機に從く應すること
れ縱横自在なる譬ば鳥の空に飛ぶが如く
目乃水り即ち如く開合淺深超然
として其跡乃尋ぬべきなく聽者をして
よく言ふ因て以て言を忘れ迹に滯らずして
其指歸を得せしむ實に洒脫の一人也
といふべし平道徒に聞ふ所を筆記せる
もの半歲にして積て五十卷に及ぶ仍て
私り其書を名て如是我聞といひ小援
て教導を弘めるの助とす頃日京師の社
中に見を以て竊に利行を我謀る刻
既に成ふ及て先生に告く先生咲て曰ふ
なきに一時投機乃說法何ぞこれを不拒に傳
ふ乎然ることいでる事既に成て後に下ふ
告く今ふ如て止むに由ふ半で如是我
聞乃名大ふるのふ起ふ宜く心學道の

諾ゐなく。顯て可ゐんとて許されも。嗟嘆予
固より鈍筆短才。先生の辯は譚論に於て。
こゝを綴るべ。遺漏あるべ。
の顛倒もまた多かるべし。世の達編を讀む
亘くこゝを以て。先生を咎むることなかるべし。予
今茲偶京師に客せり。同社の人予が
一言を徵して。筆記の證と爲さんことを頻
に乞ひて止まず。因て辭する事あたはざ

して。其由を卷端に述べて爾。

天保三壬寅年冬。於洛東　觀行
舍之旅寓　平野橋翁　重獻　謹識

心學道之話初篇

藝陽　奥田壽太講話
東武　平野橘翁聞書

前席

子曰學而時習之不亦説乎有朋自遠方來不亦樂乎人不知而不慍不亦君子乎

これハ此ごろ四ツ谷あの論語巻の一乃首ホ出て ひろう
まに大和孔夫子ハ所緯ものハ文育者也 論語乃
書物と講釋いたし白ク中平ハ中ク 朱子ものこと
なれど此所緯と魁うて古物を傳ぬ女中方やる 論
語の ものふ道乃ひ結をいつまに えこれ子曰ハ孔夫子

作らるたる十四ヶ条ハ人ハ何を学ばれ人ハ人ハ生まれて人の
人ハ学ばずして人の道を学ぶのでハ学ばれ人の
道ハ何ぞ忠孝ハ上ハ
天子将軍様ハ下ハ諸侯の家来でも又様ハ士農
工商人の形貌ハ生まれ者ハ人ハ又常ハ学ばず礼義礼
智信ハ人ハ乃ち生まれ者ハ人ハ又常ハ学ばず礼義礼
又倫ハ人ハ乃ち生まれ者ハ人ハ忠義夫婦ハ和合
兄弟ハ睦ハ親ハ人の交ハ信ハ人ハ乃ち生まれ者ハ人ハ
それ人の道ハ人ハ道ハ人ハ乃ち生まれ者ハ人ハ
ハ人ハ道ハ人ハ乃ち生まれ者ハ人ハ世界の一切万物何ぞ一つも乃ち
生まれぬものハなし人ハ生まれ者ハ人ハ乃ち一編の物書て
あるまれ生まれ者ハ人ハ毒ハ七ツ記して心象毒ハ財をつけ
犬ハ門をもり猫ハ鼠をとり牛馬ハ常荷を負て人の
力をたすけ須臾も怠ることなしハ人ハ乃ち生まれ者ハ人ハ
よって終に牛馬が牛る神ろく祭りなるぬしいて
迷惑を考ることなし犬や猫が鼠ハ仲間のうらせ
者をこれさらもない拘ハみどり花ハくをもハ花ハ
木のゆらむも枝ハ木ハ乃ち花ハ木ハ乃ち花ハ
絶ることなく昔ハ不易仕ハ乃ち遠いぶりま
せぬが長く毒なりのハ人ハ乃ち万物の霊しなるる。

その霊なる事をもしらぬゆへ人ふあしさる人が多い
道ひ或人乃物語ふ
中くゝ高せなくゝバ万物の霊乃仲間ハどさゝ
ゆんまり自由自在乃あまる結構な者者と生れて
居る者人ゝゝりハ教ふ由ぬしつい物乃くまこむたゆる
ものゝやさゝゝゝりて世なに精出して人の道を学ぶ
様ハ多ゝゆゝて世界ゝまれた奇ゝ
人あれ人の中ゝも人ゝ乃ゝ人ゝなれ人人ゝゝあせ人
概ね人ゝゝ人常ゝ人倫の乃を生りてあるハ格ね人ゝ人ゝ
乃指れつゝて居るやゝゝりのゝやゝ男ゝ乃ゝや女中方ハ

四徳ゝの指ふ門倉てゆゝゝゝゝゝゝ後多ゝまれ先ゝ会
指ゝ紀で教ゝ者ゝ行ふゝゝ指女名指ゝ義でゝ人ふ忠
義ゝ者ゝ指侍指ゝ礼で夫婦の指ゝ指ゝ者で兄弟乃年
巨指ゝ伝で明ゝ代伝ゝゝゝゝゝゝ

けまじとそこくかしこくもあ指は乎貪をる根性が
出うけうこ世指と一なづ打て仕也申うるものしや
さ報よう孝しよ食指とおりうを人れ和右して八を右
指をおり支掌煙草して八小指をおり名身弱成了
ぞうあるて八小指をおり一夜祝打明女八呼乃酒
合して巨指をおりそうこ墓のもたるよ八天を抜て祈し
ぬつても幼祈て毒をべてうど拵よ木しうを申うあ
りのうなつて幼ものくれも極くもせぬ。ふ月内ま
をの しや若い此方八此指と一なづ打て八居ぬうく
此紙くしに指合せの指さ右をおくさくて此ぬう

しうるうの神仏と祈むにてもあよ乃指と合すしやるの
左八陽右八陰陽合体して老と神成て八混沌未分の
姿こもりて天地一体自他和合の道しやよ乃
しやなんぞく心指も多の幼も多乃くうつしうの
しや。それてくて神も佛も此義良八内を文とよ乃
和会乃姿して幼祈や身の幼八拵よ木しうを
拵り著れ有て文や神仏のおくつうこ。一夫内妻
長男延命家運長久諸願成就と左後かとうひ孟て
神や佛八内ら〳〵内て申乃。
祈ても志〳〵ら れくて孫をいの。ぬる徒かけれい

それにつけて爰ふかもしの咎が出来ますに付る両会乃
百姓の内工没せ彩いの婆さまなどあつて毎月家抵
そなくる出仮ハ古仲さらつて外ゝ梦て見くらるに。
そもそも焚香も拝ゝを捕も布巾も皆和来拝用と
つて外ゝ抵ゝ至その茶や拝ゝハ茶ゝやの出拝
ゝやのつや出摘ゝやの出市巾ゝやのこいるゝゆく
表内中ゝ切来拝のゆゝくゝくゝくゝくゝくゝて出紙ハ
ゆくゝる拝の出地乃拝のゆや出書地拝の出佛来拝
のゝ新やゝゝゝ拝ゝ出乃まゝ貸ているゝゝ
手来ハ引ゝ先を拝ゝ出くゝ出てゝらつて百味ゝ見会の

出地先を貴拝ゝゝ咎して世ゝつゝゝ根ハ欲ゝゝゝ出ゝ
のゝやけれどまもまもくゝ思いるゝハあんまを示ゝ示
ゝ世を正直にくせゝるれバ祖師や仏の出ゝゝ冷ゝ
ゝつゝのゝやけをゝ爰の内乃ハゝのゝ示仮も理屈も
なゝハ出世ハゝゝゝ仮ゝ者ゝやゝゝゝと我ゝゝ
稽ゝに笑ゝで不孝も不孝と安拝も新修もかつゝ
ゝ者ゝまゝる稽ゝゝやゝ何ゝと信ゝゝゝのゝやゝの

仮乃世ゝかゝゝゝやゝゝゝゝゝゝ後の世ゝゝゝ己が世ゝまゝハ
赤来永ゝの拝示乃拝ゝまゝくゝの来来永ゝくゝの地獄ゝ
稽ゝゝゝくゝの出ゝ仮乃世ゝゝ仕ゝゝゝ出ゝ出ゝかゝの

こそ大事の世ゝやとの人ゆを支と為ては得ぬて
りのゆへゝ人しくもらくいつゆゝくとゆて
お後菜用れ食ゆゝ義ゆゆる先毎年所之へ物る
御年貢ハ所の役人ゝゝゆ度も七度と往往けゆる
ゆゆつて稼ハ出さぬ稼と者の家ゆや奇進ゆゝ人間を
流し身の使えゆでもとる者ゆゆやその上親や支の
命日ゆハ身ゆにるゝ者ゆゝて精進もせぬが祖師の
命日ゆハ四十何日掛の四二十何日掛のゝゝて精ん
する者ゆゝに掛ゆゆる遠ゝ国ゆ嫁も娘ゆも稼
者ゆゝで何ぞ一ツゝ二ツ為ゆゆゝぬゆがあくし

親ゝでも夫ゆでも大きゝゝどゝ者ゝ
稼ゆ米掛ゝ為ゝ者ゝゝ掛ゝゝゆ世ゝ河ゆ跪佛ゝく
かゝる淫ゆ為ゝつゝゝりのゝ山ゆ無ゝ世ゝ
ゆゝゝゝゆかゝゝけゝゝゝゝゝゝゝ掛ゝゝゝゝゝ人ゝゝゝゝ
ゆ米掛ゝ為ゝゝゆゝゝゝ者ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
りのゝゝ佛ゝゝ祖師ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

婆さ母がの法華ホ経ホ経菜と法華経。いつぞもよで法華経
ヨハ多い摺物へ茶をつて摺ル本持て法華経ある也、或人が
夫と見て行也、その内ハ不月中ハ幸と思へ、
岡ハ婆様乃ハ経菜様へ見る法華経ハ
ぜ法華経ぬ。なぜとゆくハ法華経ハ
法華経も肌の見る様ハ酒をいる也不浄ハ法華経ハ
様ホ摺ル本で法華経ハ法華経ゆく。そんなこ物菜様ハ
ホ様ハ様ハ様ハ

たゆまず留めようと歌にもよう盛衰変化をみる花葉さんぞうりに。こま思ひやるうのしや

方丈と一ぞの宝丸人の潤よいのうりおどうり志佛

丈しやふうて律乃の殺いぬ清めぬしも向ふ乃律義

くしてうるのしや良い仕方れれむ人歌多揚よ乃

仏と稼ふのしや面白ひ阿弥陀仏南無阿弥法蓮華経も

もりふの世話やしのしや良い向ふ清浄無垢の仏様やや

かく安楽ふ世話やくふ及ぶ良くしい方と面白ひこと

佛。面白ひ阿弥法蓮華経の阿ふとるのしや

面白ひ〳〵阿弥陀の名ぞ思ひふ阿ふ我ぞ染ぞりう

そこで志佛宗大利級那是阿弥陀号しや乃一称阿

弥陀仏百千万億劫重罪のしつてゐる又日蓮宗でハ頭九の題

目と切る大利級。十乃長敬や思ひ大地的な門

喜量の南無阿弥法蓮華経しつてゐるう文と向ふの

世話やくふの指ひ思ひて多ふ立かくしつてゐるく。

こゝ摺よ来ようて往参。大事な教へと聚ふらやふ

をるのしや文しやふうて人ハ乃聖人中乃の教

つてうて人乃道を学ばひ〳〵ねるでゆたゆたに

文ゆれまう先こに学ぶし律〳〵れまし。そのよ

ニまふふふふいどふをうるまバ学ぶふんや律ぶふふ

るとて見くの聖賢の門を叩きて教や門人後見をうきこい
たうしてそれとなく世に及ぼすなり精ぶして
まねをするのとやうに史を学ぶとやうにさまざまと文章を
巧の文育なるものの聖人ぶるの中なるもの中〜賢人とい
ふしさの人中〜中〜うつくしくうつくしくなるが出来さらふ
らてそのうちつくれば幸とそなつてやあ人自学するに
ゐる者ゆる人や忠義なる人や万の物乃ちよい人と
なる史とよりてまねをするこい孔子撮も賢と
みてハ齊かしんこをもい不賢をしてハ内心自〜
省るも作せれ又三人行へハ必我師ゆりて吾るる

者を擇てこれ心法ひそ不善なる者ハ而とこれを改む〜も
作せれさ人乃風俗をして我風俗重せしつ云そのこと
しやれ一又今時乃あい所や女中なるぬ〜こ人の
まねをせらくらて是ゆる変乃まねをう女房や
嫉妬を女婦子のまを孫をう忠臣を代小おすぐる
奇麗な役者ハ髪形しいまねをしいをの間をつい悪い
まねをする。そうやすさいまをなう変のうしやさるか
らうてゆ学をゆ和ゆ中ゆ。どゆ義ゆ忠ゆ孝ゆ。
ゆ廉ゆ乃ゆ恥ゆ。そゆらうしまをやく迎いかく張構る
ゆ師匠様ゆある程〜余ゆを為るのそ学問の乃徳

[illegible]教化を施るのことし四海くまなき者のなんと
いふ師匠通極此師匠極へ用もなく耳もなく鼻も
なくはもなきと万事よりも常乃ものくなる
物なく者くく唐でも天竺でも此名れなる師匠通
極じやなく神乃でい神明じやの又儒乃神君じや
のといひ仏道でい性じやの中じやの微じやの心乃徳
じやの玉芸じやの仏法でい仏心じやの仏性じやの
なく東乃西角じやの色人云じやの又色みでい芸神
じやの云じやの云れ又云じやのといふ師匠通極
まあ一通り此聞えなく様ぶるるのじや此門へ

此へ入ひるるまを此分此まりにつくしよりも人乃性ハ人乃性や
結小笠とでるりでハかるぬ乃中の塩味乃わしとつて
我くまぐ味つて知るのじやそれと知るし正まの人れ乃
知るる通しハ何を薩ハちくく為ハかあ〳〵柳ハみく
れハ紅人ハ孝弁忠信乃云と乃張の口癖小弟もくいつくと
じやなく丈もそまと耳ま笠とでるりで通ハ只を知る
ものとでるりんなて漏して是と大るる乃通るるる
じや孝弁忠信仁義礼智乃徳玉芸微意正心乃名目
でるり成古乃を色乃でなくく主ても此師匠通極で知る
様べやつでる掛ま木仲間じやまで色ま大乃十られて

仁義おこるしやまこと正まとく、いちりしハなぢゃ。
かあく八萬みどりハ柳紅ハ花。孝弟忠信ハ人どやしつけ
しつてまと繋てつよるゝ。爰ハ別世界の神田乃相生
丁は冬の会じゃ。そまと来お会のおせて乃神田れ
世界じゃ。しつかるりの糸乃三糸大橋ゆ。いが大
橋は三糸乃糸じゃとつて大きゑ乃を逸ふるゆ。や
そこで爰ゆも舞ハ蔦ぬれ明うて人倫を表しぬ仁
義ふ中て行ふ仁義と行ふ仁と申しれ。
天地のひしけぬえふ。ふん卵乃中は結ぶ。
皆さ爰乃金乃ふ。ふんと結ぶ。ふん文とまるのじゃ

是仁目を去ぬ。ぬ。ふ。廣ふ生ぜんとつて天地乃
開けぬえふ。ふ。ふ。の門庭。道徳ゆて二六時中学ぶ
弼ふてこ。せ。ふ。せ。ふ。文ふ。爰ふ。ふ。ふ。ふ。
教てしまふ。文ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。

まゝの事ゝがんゝゆかけるゆゝしいよゝかまる。それで
よろしくゝ人のゝもゝのゝで教ふ者ゝがゝ人ゝ忠
義ゝゝ夫婦ゝ兄弟ゝ友ゝの事ゝや家業ゝ勤ゝや万ゝの
不作ゝつゝ気に省て時ゝ刻ゝ不ゝ仏ゝの四作図抽ゝ
ゝ孝ゝの事ゝゝ不ゝ思ゝ仏ゝ刻ゝ刻ゝ刻ゝるのゝゝや見ゝゝ
ゝ不ゝ思ゝゝと仰ゝゝれゝ

おゝゝゝせゝゝゝ人ゝゝゝ教ゝ不者ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

るの中に出て来る仏道も儒道も仏乃と号称す
るやうなるが食乃四さ林も仏と名人もぞんざ
別面中てゝるてゝるが多まるを一方のおれいへるのと
いるるゝ〜丈生が出来ませんそふるゝ今まで出ふさ
るやうなさるゝ〜〜てゝ〜〜うるてまるを。
たゝてゝ此るまでおまハかゝ〜こゝれハ利るゝ出るて
赤さ鐵を変幻の鬼めも。そゝ〜自と引込の鏡の後乃
よ投げが一枚でもつげるれゝて冷形く小安乃地
外小出もしくその嗅〜さのうがさゝ〜ゝもいゝてゝて
りのゝやゝ考〜〜せね美ふるの舞足乃嗅るとゝ代

ゝやゝ乃の奇〜
何ゝも何をなゝてもいゝ〜〜やゝ此仏乃あ〜んかゝ〜ゝハ
ちゝてゝまゝあゝまゝ〜〜の張身城やゝゝて山縣〜あゝて
まゝゝ〜〜〜〜〜足北瓜丈まゝて出かゝ〜ゝの前間い牛
でゝ。よゝまゝあまをつけて考ていゝ〜〜ゝまゝせ〜〜つふ
不ゝ後ゝ乃ゝ〜ゝやゝく丈ゝ乃ゝ〜ゝれぬ此ゝ〜ゝかゝみゝ
ゝつゝすゝのゝと生〜ゝちゝつゝゝゝゝが落ゝつゝてゝ。めゝてゝふ藏乃
出ぬ中ゝゝ〜此ゝゝゝかゝぶゝゝてゝある又月ハ一月のゝかゝゝゝて
大切ゝるゝあゝゝゝゝゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝゝて婦ゝゝゝゝゝ

くるくるねやうに睡らるゝ時捕まえついてある又その上の
方へ出て蓋の底をとる中に置くこゝろもとらくて
よう〳〵流れる汗あせを絞くもらす中なる仕をもと開
団扇のねぶの言くハ風の吹込ぬ中にようぢやんと
蓋根が落てあるもどんな小蠅小虫て仕ても風の
風の吹込てこつちのあつ。そこ上蓋根がおしぴり〳〵
をるぐらしやひらく山蓋根を一つでもうてゐる
じやせ夫へ難儀なものしやあるむさ風の部の時
ホハ風の仕ぐらしてあり〳〵やうるぬそふすると
あ酒く踏めてゐる石や車へ寄あつて大煙草でしやや

るるぬそれとも拵るこゝろ悪いもかく月曜月毛ふ
ホ城張ぬるもやつくる山蓋根の落てゐる山蓋あ
かるるゆしやそして山蓋根ハ一生落ぬの要給も
のるぬ志一義の前ハめつくれ利利るつて悪のふく
仕と余りうまく山蓋根をやぶつて仕落を大くゆる
ゆ。や又ハ一身と志ふ貪地のへ山ゆ色又大切の
物あーやるつて拵仕志のへ仕志ふ仕てある先
屋の仲居くるる二合〳〵向ようの落るのの大小に
うつて更お屋ホ四門の関関門ハ蟲しつ役人と
消て長て奴商でも牛蒡でも芋でも大根でも伺て

友でいろ〳〵こまかしこうと吉ようと後人が身い幸いの吟味して後の中へ送り迎えをいろいろの御用所也給りの〳〵悪りのハ毒とも仮乃中ふ小さい石が交てあるとも。ムヽメヘと思ふ撰ぶハ〳〵ようしようものしやゆきとて墨の撰るハ〳〵でうど夫ゞ胃が弱つてのしやゆく番棒してやつてかくりの吟るこの天乃ぬつ〳〵めしやゆ又耳ハ又者のち後ぬ也玄関掃も大らふふんぬへ強出してでうど酒やのよ戸こる寄うる夫ゞ掃つてゐる夫〳〵又ハ足や指のぶり〳〵の神屋こる。こゝらのあるぬへハてうど夫ゞけ筋でも後でもはてこゝ

おーづのゆるもつけてゐる又掃、又掃乃場ふかで拭ふ清るこゝろゆめつさ掃トの事ぬ掃ふ所といふ金貝ものを釣てある夫〳〵間の時外細工細書は紙袋かゝ又腿六猪乃仕を工会乃望老掃に生てゆこ〳〵ドきこゝ〳〵りのしやでく毛皆本史古今乃者せ羽工。出来会れぬるもど天乃掃の出細工ハ何とこゝ仕事るりのトやゆ〳〵。その〳〵目ハ百乃夫形と見分耳ハ万れ者ぬと夫りけ鼻ふ嗅ハよ味いはこゝろ足に口の口と掃ら紙ゆくこゝろ思ふ人ゆ吟ゆうたれこゝ自分自立と働くぬどトしこゝ奇物ゆ仕りけでおら

ちつくまあ不審うてゆろうしませ実ホ志恵こも
文覚こも理屈ホも義理こもぐづまくすのしやぐく。
それホまあいくホまてくしらひるが。おれがかくぶ
わまがあでおれが自ゆとおまかるようぷよ思りくさ
ゆしやそのまひのろ義こうれをハかしこおれハ刈ロ
ゆしこりのが出てぐよあまぐくあくこよおれハどよ
あるくと軽こう晩まて初墓の活よい考こる申こてよと
ぼぐり移を考あくこう脳の中の一人角力どよあくぬと
掘と主関家なるどやの情あくすしやのと天と喝く
人城群わいくホ天道掘ゆにくろ考やまねとてゆんくう

我ほとこのしやるのどやるいろてうと不業老ゲ人のかし
来へあ貌いしぐん愚てくこひ舎こう拾掘まくざるゆく
いつのろホやくこのヨぐりのうとそひ付後こハ及つて
毋屋へあ貌乃繋俗ホ繋中こるりのしやゆくぐまを
社会のくろくふくぐハロくろくもぬ

中の巻へつづく